

莫切自根金生木

序

諺に貧の病あり。持つたが病あり。金が敵といふ側から
たつた三百兩とは、こいつは有難いと感心して餘りあれ
ども、算用しては不足だらけ、その所は、入我、我入、おれが、
われか、われが、おれか、どちらへ張つたら興かん平、何か難波
のあし早く、持ぐに追付く貧乏者に、足る事を教へんと、一寸一
部の此雙紙は、友人唐來參和が、變らぬ春の放題なることを、
口もとにあやなすのみ。

和光門人



爰に御存じの金々先生
 の又隣に、萬々先生と
 いふ者あり。七珍萬寶
 倉に充ち満ちて、代々
 榮耀に暮しけるが、物
 事自由に手の廻るがし
 きりに煩さく、三日な
 りとも貧乏せば今の思
 ひはあるまいと、家に
 傳はる名作の大黒を引
 きずり退けて、貧乏神
 の繪像を調べ、曆の内
 の大の悪日を縁日とし
 て信心なしける。



萬々は信心の奇特も見えねば、いろ／＼と工夫をめぐらし、何でも矢鱈に貸しかけて、世上の人に無沙汰をさせたらば、金藏も寛ぐべしと、貸金接待の高札を門口にかけて委細かまはず来る人毎に貸し出す。

「御返済のおあて事がござつては御借用は御無用でござる。」

「私は女でござりますから、證人をつれて参りませうか。」



「きつとした證人があつては、お貸し申されませぬ。」

「随分申し觸らしまして、横着な借手をあげませう。」

「かやうに申しますからにはお返し申すといふやうな人外な儀は致しませぬ。」

「これで今朝から八百二十八までは敷へたが、あとは覚えぬ。」
 「小鯨の鯨、鯨の鯨、なんときつかい。」



煤掃時分の切落^{きりおとし}の如く
 借手の入りは落ちけれ
 ども、金藏は百分一も
 あかず、これではなら
 ぬと又々工夫をめぐら
 しけるが、昔より金持
 の紙衣^{かみぎ}姿になるは傾城
 買ひに若かずと、俄に
 青樓^{あやう}の遊と志し、表は
 立派で内證は汚しい然
 の深さうな女郎を見立
 て、初會から山吹を降
 らし、三百六十日に閨^{かん}
 月^{つき}を添へての揚詰と、



城の落ちるを楽しみけり。

「エ何とえ、金山さんが一寸来いといえ、アイ行きいせう。」

「福は外へ撒きちらしの、鬼は内へく。」
「拾うたがかんじんへ通る所化の僧。」

「あの金は木の葉ではあるめえか、但しは盗み物か、どちらにしても嫌な氣味だ。」
「これは有難山吹色。」



初會の入目、夢約束、
 三會目の床花、観音の
 浦作、桃の節句や葛の
 月と語りながら二度
 れでは餘ッ程息づきさ
 うなものと思ひの外さ
 並に外れでも来ようか
 と故、尻から差圖して
 撒き内證から差圖して
 あつめ、譯もな残らず
 返す。
 一ソレお前様もソレ通
 とか何とか、ソレよ
 つしかえ、ところをす
 金。ソレよししかえ、へ
 「ソレよししかえ、へ」
 手前のいふ通り、お
 つもソレナソレ、す
 歸りは歸だらうが、金
 は難澁たの。載きたう
 「わつち共も載きたう
 はござりやすが、しや
 んなにお貰ひ申しや
 しても内證でやかま



しうござりやす
 女郎屋の仕打にぐつと
 ふさいで夜の明けるを
 待ちかね、歸る途中よ
 り駕籠に乗れば、先に
 乗りし人の忘れて落せ
 しと見えて、四五百兩
 も財布に金がありける
 が減多な口をきいたら
 又こいつもくもりつけ
 られんと知らぬ顔をし
 て、
 「私共は荒錢をとりま
 すから、そのやうに
 載きますと冥利が悪
 うござります。御愁
 悲でござりますから
 モウ酒代は御免なさ
 れまし。」
 「ソレでも手前、乗る
 時、酒代は遣り次第
 ときめたから、何と
 いつてもやらねばな
 らねえ。」

女房
 旦那
 駕籠
 酒代
 冥利
 御愁
 御免
 手前
 遣り
 次第
 何と
 いつて
 もやら
 ねばな
 らねえ



萬々はさだめの場より
 降りて江戸節など語り
 ながら行く、うしろか
 ら以前の駕籠昇、駕籠
 の中に落ちてありし金
 を持つて追つかけ、無
 理無體におつ付ける故
 いろく、いひわけをす
 れども、きゝ入れず、
 後には喧嘩となる。
 「知りもせぬものを人
 にいひかけをする細
 い奴だ。」
 「入らねえといふなら
 しやつ面へぶつつけ
 て歸れ。」
 「正直なことをいへば
 人が恐がると思つて
 けつかるか。」



今年^{こゝし}は世の中も穏かな
 れば、澤山米の買置を
 して下りを見て賣拂ひ
 損をせんと思ひつき、
 手代共へいひつけ諸國
 の米を買置きをする。
 「常陸や磐城の水ある
 まじりを兩に五升で
 買置きました。」
 「その相場なら美濃や
 尾張は二三升位のと
 だらう。何でも働
 いて高くかつてくり
 やれ。」
 「これで金藏もちつと
 せきが出來よう。嬉
 しゃく。」



搏突を打つと身が持てぬといふことを聞いてこれ屈強と大勢鐵火打を集め、四割八分を七割ぐらゐにして、胴をとりはらひかけけれども、因果と張りがかたつりになつて、空目へ空目へと出でければ、したゝか胴へひいて存じの外儲ける。
 「旦那はどうだ、よさうか、それでは又御機嫌が悪からう。」



「ちつとうけつこと云つて、誰ぞ手を出さつせえ、氣のきかねえ。」

「台が^{びん}で、ひつきりがソレ六だ。よし^{いんえ}か。」

「このやうな、^{いんえ}忌まし

いよとう博奕はねえ

「この博奕は一から六まで張れば損はねえが、さういふ張はみんな嫌ひだ。」

「一番もかけねえ。」



する程の事が間違ひければ、世の中には富で身代をしまふもあるから、さらばこれからつけてみると、その身は勿論、手代どもまでにいひつけ、見徳の悪い夢をいくらも買ひ、無性に札をととのへる。「明神の百枚も、天神の五十枚も、止めの七十枚も、感應寺の五十枚が五十番ながら皆當りました。一から止までありたけ出ました。一枚もむだはござりませぬ。」
 「ほんに當る因果ならはなばかりでおけばいゝに一までとるとはあんまりだ。」
 「私共が不働き、申上げやうもござりませぬ。」



この上は盗人にとらせ
るより外はなしと、藏
より金を取り出し、家
を開けばなしにして、
夫婦は勿論、手代下女
はしたまへ、いづくへ
か出行く。

「出入の不自由のない
やうに、家尻をば大
く切りやれ。そして
金はとりよいやうに
纏めておくがよい。」

「これをしまつたら、
盗賊除の守りを引つ
けなしておかう。」

「まんまと盗人が來れ
ばいいが。」

「金藏の途々へは、撒
きちらしおきました
ア、間があるなら
荷拵へをして、擔ぐ
やうにするといふ。
」

「匂を嗅ぎ、盗みに
はいるでござらう。」



案の如く盗人大勢はいり入りしが、あまりの大金ゆゑ、持出す工夫や荷拵へに手間どる夜もほのくゝと明けければ、とることはおいて、他所にて盗みし金箱、衣類、道具まで持つて出憎くなりしや、天婦が歸りし聲を聞くと、その身ばかり足をはかりに逃げてゆく。一よもやモウ盗んで歸りましたらう。お歸りなさいませ。」

「それだからマアちつとばかりでも取ればよかつたものを、脇で盗んだのまでおいて行くとは、長者のはぎへ味噌をつけた論議だ。」



兎角思ふやうに金も減らねば、またく思案し、京大阪から大和巡りを志し、道々も費えを考へ、一日に二三里位づつふらりと行きける。

「丁度金川泊りであろうござりませう。」

「かな川は金の縁がるさいから、日高でも川崎へ泊らう。」

「□□お金をつけると申すは、馬の爲に御きとうになります。」
「四五十里も只御負はせなされてくださりませ。」



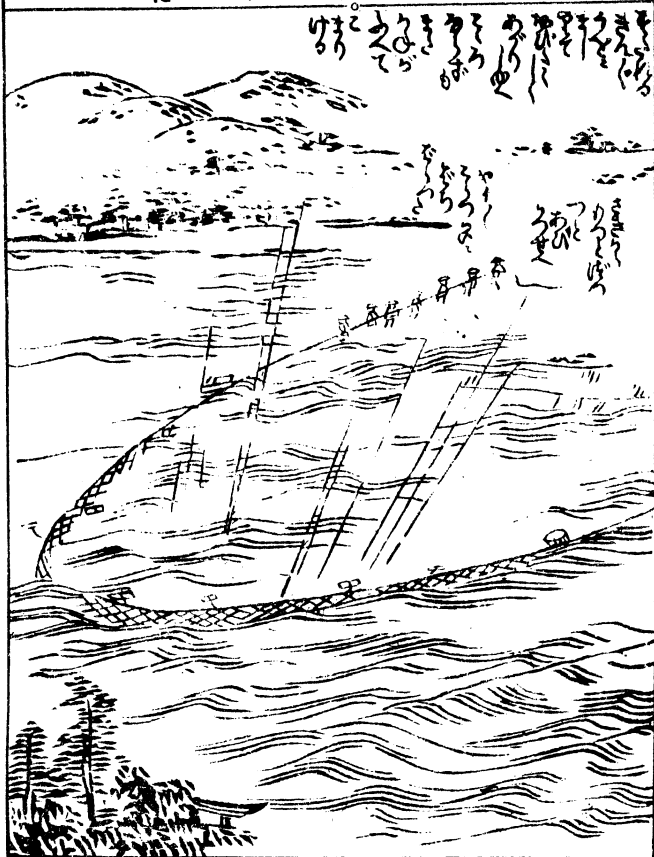
萬々先生はよき序なり
 と、江の島へ参詣し、
 また金のいる慰みを思
 ひつき、漁師ども一様
 の揃ひの浴衣を染めて
 着せ、地引きをさせし
 が、案の外海川へ廢れ
 る金銀、魚にまじりて
 夥しくあがりし故、心
 ならずもまた金が殖え
 て困りける。
 「モシあれが金なら、
 江の島かねくらと名



づけて、藏を建つて
入れておくがようご
ざります。」

「この景色は日本だ。
しかし何だか嫌みな
光がさすぜえ。また
えての物ではねえか。
うるさいこつた。」

「先からもつとづつツ
とあびかつせえ。」
「ヤイ／＼こらつ貝に
ばちばらつた。」



此頃、大雨降りつゞき川々も閤えければ、暫く旅宿に逗留のうち、この大荒に買ひおいたる米一度に値があがつて、儲けたる由、書狀着きける。

「これはまたとんだ事だ。騰り目が見えたなら賣らずにおけばえゝに。またおれに替がせる。」

「御尤もでござりますれども、先々から金に致して突きつけますから、致しやうが御座りませぬ。」

「こぼんだものだ。困つたものだ、聞えるか。」



所詮一通りでは身代も
まはるまじと、ぐつと
智慧をめぐらし、三保
の松原の松を堀らせ江
戸までの運賃かれこ
れ、この入りやうでは
よもや金もなくなりさ
うなものと、先づ大勢
請負人を集め入れ札を
させる。

「なんでも高い方へ落
しますから、技倆一
杯、つがもなく高く
積りやれ。」

「入れ札の儀でござり
ますから、随分儲け
るやうに積りまし
た。」



翌日早朝より、金にあ
 かけて地を買ひ、人夫
 を集め、あまたの松を
 掘らせければ、中より
 石の唐櫃を掘出し、開
 けて見れば、また金ゆ
 る、膽を潰して腰がぬ
 ける。

「石の唐櫃で百萬兩と
 つたやうな面をして
 怠けずと、手前も行



萬々は腰が抜けてより
 勿怪の幸ひ、ものをい
 れて養生せんと思ひの
 外、けろく／＼と治りけ
 れば、もはや我が運も
 これまでなりと觀念し
 て我が家へたち歸り、
 ちと古けれども、金々
 先生の先覺の通り、藏
 の金銀を残らずとり出
 し、海中へ棄てさせ
 る。
 一まだ奥の藏の三十戸



前が、手がつかぬ。
みんな稼いで棄てた
棄てた。」

「今まで金に恨みが数
々あつたが、のうの
うとした。」

「残らず棄てたら、あ
とへ鹽花を振らせま
せう。」

「これへ、そこらへ
零れぬやうに棄てさ
つせえ。」



ありたけの金銀残らず
 棄て、今は心にかゝる
 雲晴れたりと喜ぶ折か
 ら、棄てたる金銀一
 塊^{かたまり}になりて空中へ飛
 びあがれば、この勢に
 ひかれて世界中の金銀
 一緒に集り、萬々^{かたかた}が金
 藏^{くら}さして飛び来るは、
 目もあてられぬ次第に
 て、家内のもどもを
 金藏の屋根へあけて金
 だまを防がせる。
 「金の喰^くる聲^{こゑ}をはじめ



て聞いたが、なるほど、ウン〜といふの。」

「黄金がまじつて来るわ。旦那は大ごんまりだらう。」

「無性に焼味噌をやかせるがい。」

「ウン〜。ウン〜。」

「ウン〜。ウン〜。」

「ウン〜。ウン〜。」

「ウン〜。」



すてきさ
さんぐ
せいのの
うごゆ
おでまりと
あつてま
まじやう
どひやう
けれいば
うちよめ
うけよう
うへ
やんぬ
りやうも
あつた
のたま
ちやうそ
むくろく
はるら
ひるら
いまい
ありら
ありら
金に
をきて



「ほんに金持の女房に
は何がなるか。」

「置所のない金は逆さ
にして振つても置所
がござらぬ。」

「元利揃へてお宿へ返
済に参つたら、ちや

んと留守をつかはつ
しやるから、これま
でやつ掛けて参つた

「わし等はお蔭で金持
になりました、その

恩を忘れさせようと
は、太い人だ。御受

取なされずば、高辯
に致して御返済申
す。」



其後、夫婦は心を改め
我が家へ歸りは歸つた
れど、金が居どころの
なきほど目出度く迎ふ
春の、はるい趣向もお
笑ひ草雙紙と御はづか
しく。

